

今年の春の天文学会で東北大学の斎藤教授が発表された時の冒頭の言葉を思い出している。「モヒカン刈りコロナ面の回転反転」について話された、その初めに斎藤は気が狂ったのではないかと言われたことがあった、との言葉が私には強烈に響いたのである。

彼とは1962年日食以来の友人であるが、今回の日食についての彼からの私信に 黒フィルターで外部コロナを撮す件 ぜひ試みて下さい、(1)もしフィルターの直径を変え露出をいろいろ変えて撮ることができるとコンピューターあと処理で内部コロナの丸型から外部コロナのタテ型までストリーマーがつけられないでしょうか? カイパーで撮ったように30R \odot まではむりでしょうが、(2)予想位置を計算で出すべく、データーをアメリカにリクエスト中です。(3)私は、2半球モデルの発展でうまく説明できると信じています。

手紙の終わりには雪ダルマの話が書いてあって今年の冬、書かれたものである。この時から私の観測テーマは私の中で確定してきた。外部コロナの傾きを調べて見ようと。

観測地と私の観測

日食の2日前に現地にはいる事が出来たので早速、観測地の下見に出かける。数ヶ所の候補地のなかで、4軒ほど別荘が出来かかっている分譲地が気に入った方が多いので83名全員ここに集ることになった。

分譲地の崖の下は海岸になっていて 40度を超える連日の暑さも海からの心地よい風で何とか凌ぐことが出来た。東京理科大のメンバーの努力で日食前夜の北極星の観測から南北方向がはっきり決められていた。日食時の太陽高度は83度あって眼視観測ならば仰向けの姿勢をとることになる。

ところで古い天文書でエジソン日食のスケッチをごらんになった方ならばすぐに納得されると思うけれども、この1878年7月29日のラングレーによるコロナは15R \odot 以上にも外部コロナが拡がっていて印象的である。

私は東京を出る時にアイスノンを用意していた、観測中に後頭部にあてておくためである。尤もホテルでの私の部屋の冷蔵庫はまだ配線されていなかったのアイスノンは全く役にたたなかった。枕がわりになっただけだった。

日食当日、私は地面にマークされている南北線に直角の姿勢をとって仰向けになった。モヒカン刈りコロナが一番見やすい方向を取った、遠くにコマンドーの音が聞こえている。本影錐が見える、シャドウバンドが見える、といった声を全く聞きながして第2接触の合図から更に2分間、顔の上に真っ黒の帽子を置いたまま、じっと待っていた。とても長い時間の経過だった、空は完全に晴れていて太陽の東側に3つの惑星が光っていた。太陽コロナは極大期の形とは全くかけはなれた形だった。

外部コロナの方向は惑星群の作る方向—これは天球上の東に相当しているが—に対して50度は傾いていた。そのストリーマーの反対側には2条のストリーマーがはっきりと見えていた。残りの4分は瞬く間だった。第3接触のダイヤモンド・リングが眼に、いつまでもにじんで離れなかった。